

男の子四人の働く母ちゃんのつぶやき ～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～ (第1回)

■ 挫折がいつもチャンスにく大学入試～就職まで>

《大学入試失敗》

人にはそれぞれ、人生の方向性を決めるきっかけがあっただろうと思います。私の場合、挫折が新しい必要なステップへのチャンスのように思います。

最初の挫折は、大学入試のための共通一次(現在のセンター試験)。希望する大学で物理を学びたかったのですが、自己採点では到底足りず。高校の担任は、「志望大学を選ぶか、物理を選ぶか」と問いました。結局、物理を取りました。当時名前も知らなかったその大学が私の生き方の価値観を育んでくれました。1924(大正13)年に創立された大阪女子大学は全国で2番目の公立女子専門学校(女子専)です。「女性学」という科目が必須科目であり、教員も女子専を卒業して、京都大学や大阪大学で学位をとって、母校で教鞭をとっておられる方も多く、「女性も責任ある仕事を持ち社会に貢献すること、誇り高く生きること」を、実践と教育の両面から私達に教えてくれました。

《合気道師範との出逢い》

学力が足りず、第一希望の大学に行けなかった。そんな事は大了なことでもなく、すぐに乗り越えられる挫折と思われるかもしれませんが、自分の取り柄は勉強しかない思っていた18歳は、小さくない喪失感を味わいました。友もいてそれなりに楽しい大学生活の中にあっても、自分の中に支えを探しました。入学当初は、中学から続いていた卓球部に所属します。理由は不純で、「経験者だから楽にレギュラーの座につけるだろうな」。実際、団体戦出場人数ギリギリの小さなクラブだったこともあり、祭り上げられるレベルで大切にされましたが、ずるい自分が嫌でたまりませんでした。卓球部の隣では、合気道部が楽しそうに稽古をしていました。合気道部は5月GWに新入生歓迎合宿が予定されていました。転部するならその時期までが限度。義理と想いが葛藤しました。仲のいい友達が既に合気道部に所属していたことも助けになって、思い切って、卓球部を退部し、合気道部に入部しました。運動神経もなく自信もないのは変わりませんが、やっと自分の大学生活がスタートした気がしました。

合気道部では、年に数回の宿泊稽古に、東京から神主でもある佐々木将人師範をお迎えしていました。この師範との出逢いは大きな節目でした。60歳近くなっていた師範は、合気道の稽古だけでなく、日本神話、精神性(スピリチュアル?)などの話を沢山してくださいました。それは私が全く聞いたことのなかった世界でした。全員集合の場での師範との問答(?)の時間は名物でもあり楽しみでもありました。今思えば、まさに「オープンカウンセリング」でした。禅問答のような質問の投げかけもあれば、心に抱えている悩みが出されたりもしました。私は、「死ぬのが怖い」「自信が持てない」。そんなことを質問しました。「死んでから考えても間に合うだろ?今を

生きなさい」とか「心配は消極的概念と取り越し苦労だ」というような、率直で明確で、本当に気が楽になる回答もあれば、持ち帰って考えさせるような回答もありました。2年の月日をかけて私を変えてくれた回答は「自信がない」についてのものでした。潜在意識について話を信じがたい様子で聞く私に「毎日寝る前、起床直後に布団の中で「私は〇〇できる」と言ってみなさい。潜在意識が叶えてくれるよ」と師範はおっしゃいました。「科学至上主義」だった私には、「いくらなんでもそんなはずない」と思いました。でも、もし本当にそうだったら、もったいない話だとも思い、『有り得ないけど、明確に達成したかどうか分かる事柄』として「私は主将になる」と言ってみたりもしました。また、書家でもある師範は合宿の度に、沢山の色紙を書いて下さり、合宿最終日に、一枚ずつみんなに下さいました。裏返して山積みしてある色紙から内容を見ずに一枚引くのです。参加者が何をもらうのか、自分に何が来るのか、ワクワクしたものでした。



「不思議と今の自分に合ったものが来るのよ」という先輩の言葉に、1年の夏合宿で私が引いた色紙は「笑へ」(写真参照)でした。正直ガックリきました。みんな、「人生山河」「味覚人生」「使命」等、カッコいいのをもらっているのに、私はこんなつまらない言葉なんて、、、。当時はそんな風に思いました。今思うに、まさに、私に最高にぴったりの素敵な言葉だったんですね！そんな風にして、大好きな合気道を中心に私の大学生活が回り始めました。合気道部最優先で、クラブに遅れたくないから実験実習で残されないように予習しました。年に数度の師範の話は、繰り返し繰り返し、「心の持ち方が人の人生を決めるんだ」ということを伝え続けてくれました。そんな合気道どっぶりの2年のある日、駅から大学まで歩いている時、ハッとしました。「視界に足がない」ことに気づいたのです。そうなんです。私はずっと下を向いて歩いていたので、視界の下ところに、いつも、自分の歩く足が左右交互に見えていたのです。この気づきに、「私は変わったんだ」そう実感しました。そして更に1年後、一番下手くそで、クソ真面目で心配性の私は、主将になりました。初段の免状とともに新しい私を頂いたと思いました。

《実験物理から理論物理。そして、学部卒で就職活動へ》

卒業研究は念願の物理教室へ。しかし、私は全く実験に向いていませんでした。実験は二人ペアで行います。ゼミ生は3人でしたが、みな私と組むのを恐れていました。個人でできる試料作成をすれば、酸素ボンベのバルブを逆に回してしまい、酸素漏れで実験棟全体にひと騒動巻き起こし、何をやってもうまくいきませんでした。絶望と無力感の中、夏休みに入る前には、テーマ変更を希望します。最終的には、数年前に京都大学から着任された東村武則先生の研究室で、コンピュータを使った理論物理のテーマに携わることになりました。プログラミングはとても面白く、それまでの反動もあって夢中になりました。親に、振袖も要らぬ、卒業旅行もしないと頼み込んで、コンピュータとプリンターを買ってもらいました。夜中に印刷するとうるさくて寝られぬと不評のラインプリンター、懐かしく思い出されます。研究室には卒研究生は私一人でした。レベルの高い大学から来た先生は、私の低いレベルを受け入れがたく、「できなくても努力することが大切だ」という甘い私に研究の世界は違うのだと叩き込みました。私は、好きなことに対して一生懸命取り組みはするけれど、人間的には、わがままで、思い込みが激しく、かなり癖のある、

やりにくい学生だったと思います。先生とは沢山の話をしました。物理(学問)に対する姿勢、生きる姿勢・哲学、信念、そういったものを先生から教わったように思います。先生には、その後、就職してから、会社を辞めて大学院へ行きたいとの突然の相談にも載って頂き、大変お世話になりました。先生がおられなければ、今の私はありません。

当時、母校には大学院がなく、希望する人は、他大学へ進学していました。「大学院へ行ってみるという道もある」とのお話があったのは、学部4年のある日のことでした。思いがけない道に大喜びで親に相談すると、「あなたにそんな能力もないし、資金も無い」と一喝。自分自身も、そうだよなあと思って、あまり悔しい思いもせず、納得。学部卒業での就職活動を始めました。

